

様式2

学校評価シート（自己評価）

十文字女子大附属幼稚園

1、園の教育目標

これからの時代、小学校以降の学校でも、社会に出てからも、自分で考えて実際に行動しながら自分のため、世のために学び続けていく人間が求められる。教育の原点である幼稚園において、自分で何をするか、どう過ごすかを決めていく経験を重ねていくことが、十文字学園の建学の精神「身をきたえ心きたえて世の中にたちてかひある人といきなむ」に基づくことになる。

本園では、遊びを中心とした生活の中で、自ら考え行動する力、人とともに取り組む力を育むことを目指し、①自発性の重視、②人と関わる力の育成、③環境を生かした生活、④保護者との連携に取り組む。

2、具体的な目標や計画

1、本園の魅力を発信し、各年度の入園者数の定員を確保する

2、教育・保育活動を充実させる

- ・保育者自身の保育力向上を目指して自己研鑽に努め、保育全体の質向上につなげる
- ・チーム幼稚園を目指して、協力して保育に当たれる体制・環境を構築する
- ・園児の健康・安全が十分守れる体制・環境を整える

3、保護者との連携を推進する。

- ・保護者が園と関わる機会を増やす
- ・保護者の育児向上につながる情報を提供する
- ・幼児一人ひとりの安定した生活を守りながら、保護者の多様なニーズに対応していく

4、大学との連携を推進する

- ・幼児教育を目指す学生の実習の機会に応じる
- ・大学の授業・教員の研究への協力・支援に努める
- ・大学教員の専門知識や経験を園の教育・保育内容向上に活用する

5、地域との連携を推進する

- ・近隣の様々な関係者との連携、連帯を深める。
- ・地域への情報発信とともに、地域からの意見聴取の機会を設ける

3、評価項目の取組及び達成状況

| 評価項目 | 結果 (※) | 結果の理由 |
|----------------------------|-----------|--|
| 本園の魅力を発信し、各年度の入園者数の定員を確保する | C | いちご組体験会実施、運動会未就園児見学再開、地域園庭開放日数増、ホームページに動画掲載、Instagram開設など、内容充実及び情報発信に努めたが、すぐに応募者増加にはつながらず、園児確保は引き続きの課題である。 |

| | | |
|--|---|---|
| 保育者自身の保育力向上を目指して自己研鑽に努め、保育全体の質向上につなげる。 | A | 年間・学期のスケジュールを立て保育内容を充実させ、学期末には遊びの履歴として子ども達の経験を可視化した。本園の保育動画を題材にした研修会、本園の保育実践を発表した保育実践協議会に多数の教員が参加し、他園の保育者と語りあう機会を持つなど自己研鑽に努めた。保護者アンケートの結果からも、保育の質向上が評価された。 |
| チーム幼稚園を目指して、協力して保育に当たれる体制・環境を構築する | A | 保育中、保育後、会議で話し合うなど連絡を密にして協力して保育に当たってきた。チームで保育していることが保護者にも伝わっていることが保護者アンケートで確認された。今年度から専任教諭が夏季の預かり保育、5時以降の延長保育を順番に勤め、全職員で保育内容を検討するなど預かり保育への意識が変わった。担当職員との連携の時間確保が課題として残るが、記録の書き方を工夫して引継ぎがよりうまくいくように改善したい。 |
| 園児の健康・安全が十分守れる体制・環境を整える | A | 全職員が報・連・相に努めるとともに、保健管理センターとの連携を強化し園児の安全がより確保されるようになった。療育に通う子ども達に関しては、療育先とも連絡をとり、より良い成長に繋がるよう援助した。定期的に安全点検を行って優先順位の高いものから改善した。不備に気づいたら報告しすぐ対応をすることが肝要である。園の危機管理マニュアルに沿って、様々な場面や時間帯での危機状況を想定して話し合いを重ねる必要がある。 |
| 保護者が園と関わる機会を増やす | B | 始業式・終業式の保護者参加を復活したことで、園の生活の観察、保護者同士の懇談、教師との対話の機会となった。園の行事における父母会の役割を明確にし、双方向性のやりとりを重ね、園と父母会(保護者)が互いに理解し協力し合える関係性をさらに構築していきたい。 |
| 保護者の育児向上につながる情報・体験を提供する | A | 情報発信(ブログ、インスタグラム、動画など)に努めたので、園での生活の様子は伝わりやすくなり、保護者の理解が深まった。父母会主催のイベントも多く開催され、保護者同士の交流と共に、多くの保護者が園に足を運ぶ機会となった。ポスター掲示、インスタグラムでの情報発信などに努めたが、子育て講座「はらっぱ」参加者は増加していない。参加者の満足度は高いので、今後も呼び掛けていきたい。 |
| 幼児一人ひとりの安定した生活を守りながら、保護者の多様なニーズに対応していく | A | 今年度から18時までの延長保育と夏期休暇中前後合計2週間預かり保育を実施した。内容については会議で話し合い子ども達の安全を考えながら保育者にも負担がかかり過ぎないようにした。今年度の経験を踏まえ、来年度から朝の預かりを実施予定であるが、人員配置の改善・職員の補充など職員の負担増及び子どもの負担増にならないように検討する必要がある。 |
| 大学との連携を推進する | A | 大学教員が外部研修で園の保育動画を題材にしたため、解説・助言をもらうとともに、他園の保育者との話し合いの機会を持つなど自園の保育を見つめおす機会となった。保育を学内に公開する意義は大きいですが、設定しても大学からの参加者は少なく、今後持ち方を検討する必要がある。大学関係者に同席してもらう園内研修の機会を増やしていきたい。 |
| 地域との連携を推進する | A | 地域の未就園児親子への園庭開放日を増やした。新規の参加者も確実に増えてきた。気軽に参加できる園庭開放から、「はらっぱ参加」「いちご組」「入園」へとつなげていきたい。年長組は小学校へ行き、1年生と交流した。子ども達にとって大きな経験となったが、意味のある交流になるよう小学校の先生方とさらに深く話しあいたい。地域の療育施設とのつながりが深まり訪問指導の際に本園の参観及び園児の情報共有の機会を重ねられるようになった。 |

4、具体的な目標や計画の総合的な評価結果

| 結 果 | 理 由 |
|-----|---|
| B | <p>コロナ禍で見直してきた園生活を引き継ぎつつ、コロナ前の生活に戻すところは戻すことができ、園生活・保育活動はとても充実していた。保護者のニーズに対応して18時までの延長保育と夏期休暇中前後合計2週間預かり保育を実施した。保健管理センターとの連携は確実に強化され園児の安全がより確保されるようになった。情報発信(ブログ、インスタグラム、動画など)に努めたので、園での生活の様子は保護者や外部に伝わりやすくなり、園が大事にしていることの理解を深めることができた。</p> <p>本園の保育動画を題材にした研修会、本園の保育実践を発表した保育実践協議会などに多数の教員が参加し、園の保育を外に開き、研究者や他園の保育者と語りあう機会を持ったことは、保育の質向上に大いにつながった。</p> <p>地域の未就園児親子への園庭開放日を増やしたことで、新規の参加者も確実に増えてきている。地域の療育施設とのつながりが深まり訪問指導の際に本園での生活、療育先での姿勢の情報共有の機会を重ね、成長に繋がるよう双方からの援助を重ねることができた。</p> <p>入園者数の確保においては十分な成果にはつながらなかったが、「子どもの主体性を大事にした本園の保育・生活の実際」は浸透してきていると感じた。</p> |

○結果(※)について

| | |
|---|--------------------|
| A | 十分達成されている |
| B | 達成されている |
| C | 取り組まれているが、成果が十分でない |
| D | 取組が不十分である |

5、今後取り組むべき課題

| 課 題 | 具体的な取り組み方法 |
|-----------------------|---|
| 各年度の入園者数の定員を確保する | 今年度取り組んだこと(情報発信・地域への園庭開放・いちご組の充実・預かり保育の充実)を地道に継続発展させていく。 |
| 保育者のさらなる資質向上を目指す | 引き続き外部の研修会に積極的に参加し、保育を見つめ直し発信するとともに、他園の保育からも学び、自園の保育の質向上につなげていく。地域においても、開かれた幼稚園づくり(大学との連携、地域の小学校・幼稚園・保育園との連携、療育との連携)に努めていく。「子ども達にとって」という視点を最優先して、きりん組担当教員と園の教員で情報共有・共通理解した上で保育内容・環境を十分検討していく。 |
| 保護者が園と関わる機会を増やす | 実施した保護者アンケートの結果を受け止め、園運営に活かしていく。園の保育に保護者が参加する機会を増やし、双方向性のやりとりを重ね、園と父母会(保護者)が互いに理解し協力し合える関係性をさらに構築していく。 |
| 近隣の様々な関係者との連携、連帯を深める。 | 地域連携プロジェクトに協力し、園ができる役割を担うことで地域とのつながりを深める。未就園児に対しての園庭開放に加えて、地域とつながる取り組みを新たに模索する。16年前から継続している「はらっば」(十文字学園女子大学の教員、外部講師による講演会)を地域に広く発信して、近隣の子育て家庭の参加を広げていく。 |

学校評価シート（学校関係者評価）

幼稚園 学校関係者評価委員会

日 時 令和6年2月29日（木）

15:00 ～ 16:30（時間）

出席者 外部評価委員（5）人

内部評価委員（2）人

1. 自己評価で設定した目標・計画、評価項目の設定は適切であったか

適切であった。園の教育目標を核にして中期目標・中期計画に沿って各年度の計画が立てられている。令和4年度自己評価での成果を維持しつつ、課題については積極的に具体的な方策を立てて実行に移していたことが自己評価の結果に反映されていた。さらに次なる課題が明らかにされていた。この繰り返しの中で、地道に園としても各教員としても力をつけていることがうかがえた。

2. 評価結果の内容は適切であったか

裏付けとなるデータ等もあり細かく評価してあり適切であった。評価項目に沿って、教員各自が真摯に1年間の保育を振り返って自己評価を行い、全員で持ち寄って園としての評価を検討して出された結果であることから、信憑性が高いと考える。

3. 今後取り組むべき課題は適切に設定されているか

色々考えられて設定されており適切である。令和5年度の自己評価の中に今後の課題が明確にされており、それに対する対応策も記されており、希望を持って次年度に向かおうとする姿勢が伺えた。預かり保育の担当者の確保、打ち合わせ時間の捻出など、予算とのバランスの中で実施可能な方法を検討していく必要がある。

4. 今後取り組むべき課題は適切に行われているか

適切である。令和5年度の自己評価で出てきた課題や新たに取り組むべき課題は令和6年度の計画に盛り込まれている。大学の附属であることは他園にはない本園の最大の魅力である。キャンパスの環境・施設など物理的な要素だけでなく、人的なリソースをさらに活用しながら、課題に取り組んでいくと良い。一番の課題は園児確保ということであるが、通常時間の保育に支障をきたしたり、子どもに無理をさせることにつながる可能性もでてくるのが危惧され、どこをターゲットにするのかを明確にする必要がある。本園の良さが失われないように課題に対応していくことが求められる。